

書 評

平岡昭利編『離島研究Ⅱ』

B5判, 222ページ, 2005年9月15日刊, 海青社, 2,800円+税

本書は同編者による『離島研究Ⅰ』(2003年6月7日刊)に続くものとして出版された。前著と同じ形態で12の離島について, 13人の執筆者が分担記述するというスタイルを踏襲している。編者は「今もって“離島”という言葉は好きではない」としながら, 「島嶼研究」という表現をタイトルにせず, あえて前著と同じく「離島研究」とした理由を以下のように述べている。

…離島という響きからは, 離農, 離村, 離職などと同様, 島から離れる, 離れ島, ひいては過疎地, さらに離島苦などが連想される。また離島のイメージに呼応するように, 今日, 島嶼地域は本土との所得格差も大きく, 職場, 教育, 医療, などを含めた居住条件が不利なことから, 人口減少率や高齢化率も高く, 今後, 一層生活維持が困難となる島々も増加すると考えられる。このように島々を取り巻く環境が厳しさを増す状況を考慮して…、再び「離島研究」を用いたという。

前著の書評(新地理51—3)でも述べたが, 「島」に住む評者の思いでは, やはり「離島」はマイナスイメージが強い。とはいっても, 「島嶼」では編者のいう上記のニュアンスが薄れてしまうため, 結局「離島」という用語を使わざるを得ない。将来もこのジレンマは残るだろう。さて, 本書の目次は次の通りである。

I 島嶼の特性と移動と結びつき

1章: 島嶼住民の最寄りの中心都市での滞在可能時間

2章: 奄美大島における住民居住地移動—誘発要因と空間の変容—

3章: 沖縄県・浜比嘉島の架橋効果について

4章: 八重山諸島における遠距離通耕

II 島嶼の産業構造とその展開

5章: 大東島の開拓とプランテーション経営

6章: 香川県・栗島における基盤産業の変容—

海運業から養殖業へ—

7章: 壱岐・長島の漁業の持続性と漁業者の集団的機能

III 島嶼の集落と生活行動

8章: 五島列島・福江島における近年の小売業と消費者購買行動の変化

9章: 八重山・小浜島の集落立地と生活様式

10章: 竹富島における町並み保存運動—赤瓦は何を語るか—

11章: 宮古島・伊良部島におけるアワ栽培の存続と地域社会

12章: 山形県・飛島の人口減少と住民の生活行動の変容

1章では離島住民の切実な問題である, 最寄りの中心都市での滞在時間を取りあげ, 全国の離島を取りあげ精力的な分析を試み, 滞在時間延長の方策を提案している。特に表1—1は圧巻で, 研究者の執念が感じられる。2章では離島住民の移動について, 奄美大島の集落を例に住民の移動歴を検討し, 移動パターン「5つ」を明らかにしている。3章では沖縄県浜比嘉島を例に架橋建設がどのような影響を与えたかを詳細に調べ, 架橋効果と集落間の差異について述べている。評者も学生諸君と浜比嘉島で調査した経験があるが, 架橋の「マイナス面」では, 治安の悪化, 不法投棄大型ゴミの持ち込みなどの事例があった。したがってすぐ南に位置する津堅島では, 架橋計画に「反対」している住民の声も聞いた。4章は過去に八重山諸島であった「遠距離通耕」について詳細になされた, 故浮田典良先生の論文(地理学評論47—8)に加筆・修正されたものである。竹富島・新城島・鳩間島から農民が西表島へ「船で通耕」したり, 「田小屋」に泊まり込んでの農業など, 当時のようすが生き生きとした描写で記録されている。

5章では南・北大東島を取りあげプランテーションの経営の歴史について報告されている。沖縄では「ウフ(=大きい)・アガリ(=東)島」と呼ばれるこれら島は, 太陽の昇る東の方角にあるニライカナイ(神の国・聖地)とされてきた。1630年ごろ欧製地図に登場し, 1885年日本領になった。その後1899年, 八丈島出身の玉置半右衛

門らによる開拓移民が集団入植・開墾した。彼の作った玉置商会が製糖工場を中心に、学校・病院・鉄道を含め、農民・労働者を「経営・支配」する状況は、さながら「玉置王国≡独立国」であったことが伺える。図5—8は昭和初期に住民を「八丈系」「沖縄系」「静岡系」に分類した興味深い分布図である。評者の学生諸君との調査経験でも、文化・歴史的には沖縄というより八丈島に近い形態（例えば神社、神輿、相撲大会、江戸前寿司など）が確認できた。本章は、これから大東諸島研究を志す人にとって、貴重な先行研究となるだろう。

6章は粟島（香川県）で、近世の海運業から明治以降船員の島、さらに養殖の島へと変化した歴史を丹念に追っている。7章は小離島でありながら人口減少しない長島（長崎県）についてその要因を探っている。8章では離島の消費者行動を計量的に分析し、購買構造や商圈の変化を明らかにしている。

9章の小浜島（沖縄県）は、「ドラマちゅらさん」で一躍観光地化したが、一方では風水思想に

よる集落形態など、大変興味深い話題が多い。本章では農耕儀礼と集落空間が詳しく報告されている。10章は、竹富島（沖縄県）の赤瓦の伝統的建造物群について歴史的景観保存・創られた伝統という視点で考察されている。11章では、伊良部島（沖縄県）のアワ栽培が、地域の収穫儀礼と緊密に結びつく事例を紹介している。12章では、人口流出の著しい飛島（山形県）について、島民の「別宅」に視点をあて地域の課題を検討している。

以上12章（12本）の論文は、それぞれの研究者が独自の切り口で、生き生きと「島」を地誌的に描いている。これまで「離島」はマイナスイメージでとらえられることが多かったが、本書はそれを払拭し、新たな島嶼研究に私たちを導いてくれる。特にこれから、卒業論文等で「島」を研究してみようという学生諸君・若い研究者の方々には、「手法」を学ぶ意味からも本書はお勧めである。前著『離島研究Ⅰ』とともに、ぜひ多くの方に読んでほしい一冊である。

（西岡尚也）